



佐々木 迅
QVCジャパン
取締役社長

経済同友会 つながる▶▶
リレートーク
#212

きょうじょ
「強恕」との出会い



久野 正人
エム・シー・ジー
代表取締役

「恕」は、普段あまりお目にかからない漢字です。一瞬、「怒」と見間違えてしまうかもしれませんが、意味は真逆です。「恕」に出会ったのは今年5月、山口県萩市の松下村塾でした。

4年前に会社組織を離れ、ストレスの少ないニュートラルな気持ちで「世界で勝てるリーダーを創る」という自分自身のミッション実現に向けて、意義ある日々を過ごしています。(株)エム・シー・ジーのエグゼクティブコーチとして独立・起業と同時に私塾「久野塾」(今年7月に一般社団法人に改組)を設立しました。世界遺産(訪問当時は登録推薦)の松下村塾で上田俊成宮司の講義を久野塾メンバーに体験してもらう機会をプロデュースしたいと思い立ったのが昨年5月。それから一年後の今年の5月に夢は実現し、当時の高杉晋作、久坂玄瑞など幕末・維新の英傑が学んだ講義室(吉田松陰先生が塾生に講義を行っていた8畳ほどの小部屋)で宮司の講義を拝聴しながら、各自、自身の志をしっかりと省察することができました。

なぜ一年余りの短期間で松下村塾は塾生92名もの多くの人材を輩出することができたのか…。至誠、知行合一、集団指導と個人指導、性善説に立つこと、そして宮司は最後に「強恕」を強調されました。「自分がされたくないことを他人にしないこと、他人の立場や心情を察する気配り力、思い遣る力」、それが当時の塾生に刻み込まれ、志を実現する原動力になったそうです。

昨今、SNS(Social Network Service)上を謳歌する「気軽な」コメントには見かねるものも多く、個人が気軽にメッセージを発信できる時世にこそ、われわれは「強恕」の気持ちを深く意識して行動すべきです。「相手を思い遣る」ことで言葉の質が高まり、SNSという新たなコミュニケーション・ツールを、生活の豊かさの向上に本当の意味で活用できるのではないのでしょうか。松陰先生の「強恕」は、現代社会に生きるわれわれにそのように投げかけ、人としての言動を問うています。

明治維新後150年の時を超え、技術の進化は目覚ましい一方、人の本質は変わらない。そのことをあらためて松下村塾で学んだ特別な一日でした。

▶▶ 次回リレートーク

日色 保

ジョンソン・エンド・ジョンソン
取締役社長